



# 七夕ものがたり



夏の夜空を見上げれば、ぼんやり白く天の川が光ります。  
その天の川をはさんで光るふたつの星は、織姫と彦星。  
一年に一度だけ、七月七日の夜にふたりが無事に逢うことが  
できますように、短冊に願いをこめて…

(4分)



1. 昔々、天の川の西の岸に、美しい娘がいました。天の帝の娘で、名前を織姫といいます。織姫の仕事は、その名のとおり、はたおりをすること。天の人々の着物をつくるため、毎日休むことなく働いていました。



5. とても仲の良い夫婦となった、織姫と彦星。



2. そんな娘を見て、帝は思いました。「これでは娘がかわいそうだ。いつまでも一人では寂しいだろうから、そろそろ結婚してはどうだろうか？」



6. ところが、仲が良すぎて、二人は遊んでばかり。まったく仕事をしなくなってしまったのです。



3. 一方、天の川の東の岸には、彦星という若者がいました。働き者で、いつもまじめに牛の世話をしています。



7. 織姫が仕事をしないので、天の人々は着物を新しくすることができません。



4. 天の帝は、一目で彦星が気に入り、織姫と彦星は、結婚することになりました。



8. 彦星の飼う牛もやせ細り、汚れ放題です。



9. 天の帝も、最初は大目に見ていましたが、時間が経っても二人は全く仕事をする気配がありません。これはなんとかかせねば、と考えました。



10. そして、「もう一緒に暮らすことは許さん。以前のように、天の川の東と西で別れて暮らすがよい。」と、二人を引き離してしまっただのです。



11. それからの毎日。織姫は泣いてばかり。仕事もなかなか進みません。



12. そんな様子を見て、さすがにかわいそうに思った天の帝は言いました。

「織姫よ、そんなに彦星が恋しいのなら、一年に一度だけ、彦星に会うことを許してやろう。」



13. それからの二人は、一年に一度会うことを楽しみに、しっかりと仕事をするようになりました。



14. でも、雨が降ると、天の川の水が増えて渡れなくなってしまいます。



15. そんな時は、どこからともなくたくさんのカササギが飛んできて、天の川に鳥の橋がかかるのです。



16. これが七夕祭りの始まり。



17. せっかくのチャンスに雨が降らないように。そして、織姫にあやかって、縫いものや字が上手になるように、願い事を書いた短冊を、笹に飾りようになったのです。



語り：山崎和佳奈 脚本：鷺巣 亘 イラスト：塚田洋子 編集：福留政彦